

「震災伝承検討会議」の 結果概要

平成29年1月17日

震災伝承検討会議(第4回)資料

第1回 震災伝承検討会議の議題

- (1)「震災伝承検討会議」の役割・スケジュール
- (2)「石巻市震災伝承計画」の枠組み(案)
- (3)震災伝承の現況と課題
- (4)震災伝承等に関する意見・意向

第2回 震災伝承検討会議の議題

- (1)第1回検討会議を振り返る
- (2)現地視察報告を確認・共有する
- (3)石巻市における震災伝承への取り組みを共有する
- (4)今後の進め方とスケジュールを確認・共有する
- (5)今後の震災伝承等に関して協議

第3回 震災伝承検討会議の議題

- (1)これまでの「震災伝承検討会議」を振り返る
- (2)今後の震災伝承等に関して協議する

意見の振り返り

- 第1回会議では、意見が「震災伝承の理念の考え方」、「伝承する内容」、「伝承の方法」に概ね集約され、その他に「情報館のあり方、直すべき点」などについて意見が出された。
- 第2回会議では、「震災伝承の理念の考え方」にテーマを絞り議論
- 第1回会議後には現地視察も実施。視察参加者による視察報告にて意見聴取を実施した。

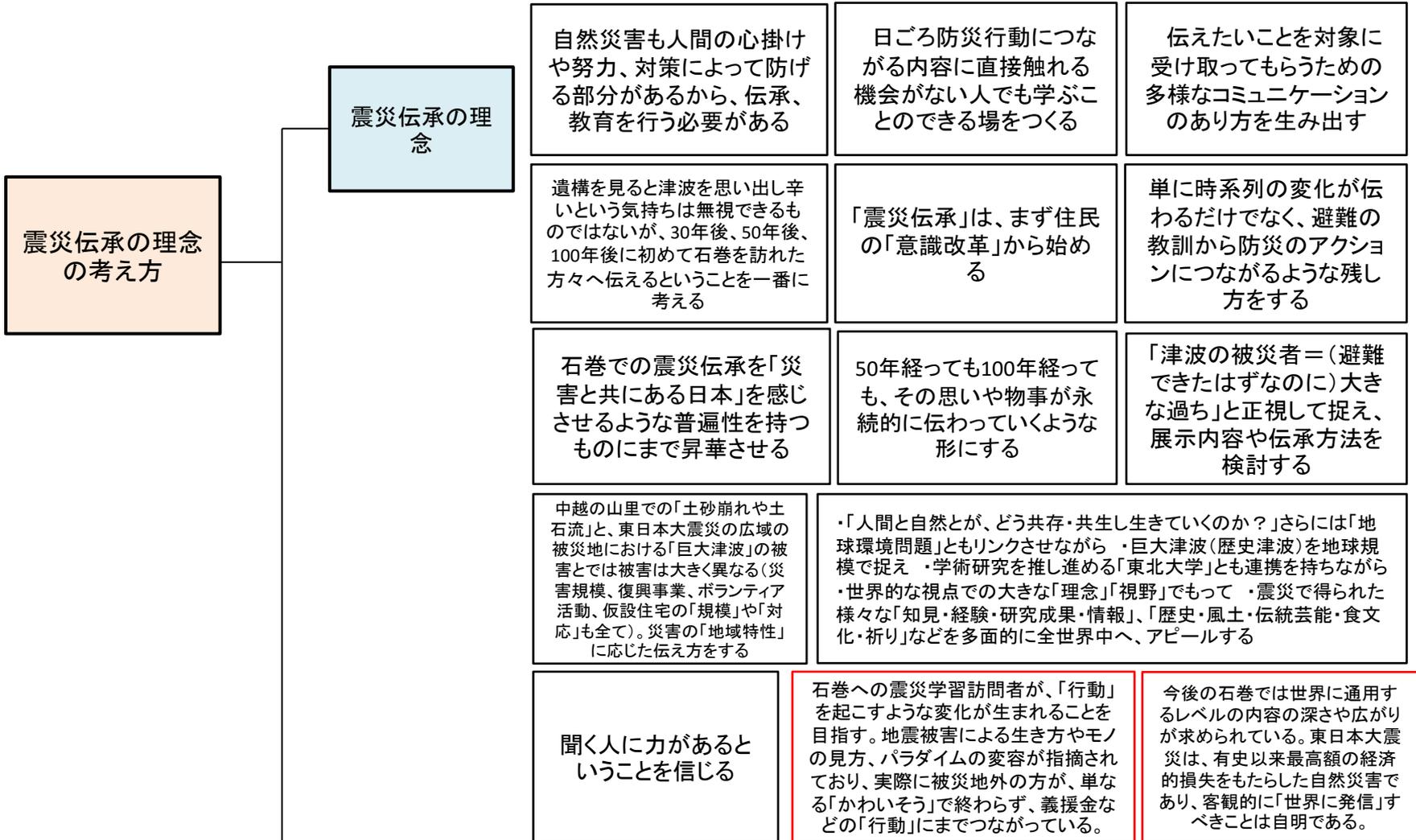
意見の振り返り

- ・第3回会議では、震災伝承計画の素案(たたき台)が示され、それに対する意見を中心に議論が行われた。出された意見を踏まえ、次回会議には石巻市としての震災伝承計画案を提示することが確認された。

意見の分類

1. 震災伝承の理念の考え方
2. 伝承する内容
3. 伝承の方法
4. 施設のあり方
5. 組織・体制
6. 震災伝承計画の策定方法
7. たたき台に対する意見

1. 震災伝承の理念の考え方



1. 震災伝承の理念の考え方

震災伝承の 理念 つづき

東日本大震災「最大の被災地」である石巻市は、震災経験を生かし、今後国内外で起こりうる自然災害に対する「社会的貢献」が求められる。世界的な視点での「石巻市としての立ち位置」を確認し、基本理念に組み込み、内外へと情報発信して行く。

私たちは経済の価値を超える命の価値を世界に向かって定義していく存在になりたい、という個人的な思いがある

今後も合併で市域が変わるかもしれないことを考慮して理念を考える

「～のために私たちは伝承計画をつくる」「そのために～をする」という風に、目的(～のために)と行動(～する)明確に分ける

過去の津波被害を踏まえた基本理念にする

「多くの命を失ったから今伝えている」ということも入れる

「命の大切さ」「命を守る」という伝承の一番大切なことを基本理念に入れる

基本理念や背景の記述において、市民憲章のような「意思」を感じられる案を期待する。最大被災地として、多くの悲しみを背負ってしまった石巻市だからこそ、「同じ思いをする人が一人でも少なくなるように」と痛恨の念と将来の戒めを込めた伝承計画を策定する。

震災直後に「普通の暮らしがどんなに貴重だったか・・・」という言葉をよく聞いた。伝承計画ではなく、「生き方」や「死生観」まで踏み込んで提示する。

何のために震災伝承するのか(文案): 2011年3月11日、多くの石巻市民は、大切な命を失い、これまでの生活のあかしでもある多くの物を失いました。これは地球に生きる上で避けられない事かもしれませんが、過去の経験や教訓、または世界の別の場所で起こった事に耳を傾けていれば避けられたものも多かったはず。今を生きる私たち、これから未来に生きる人、世界でこうした災害の可能性に直面しつつある人々とつながっていくためにこの伝承計画を定めます

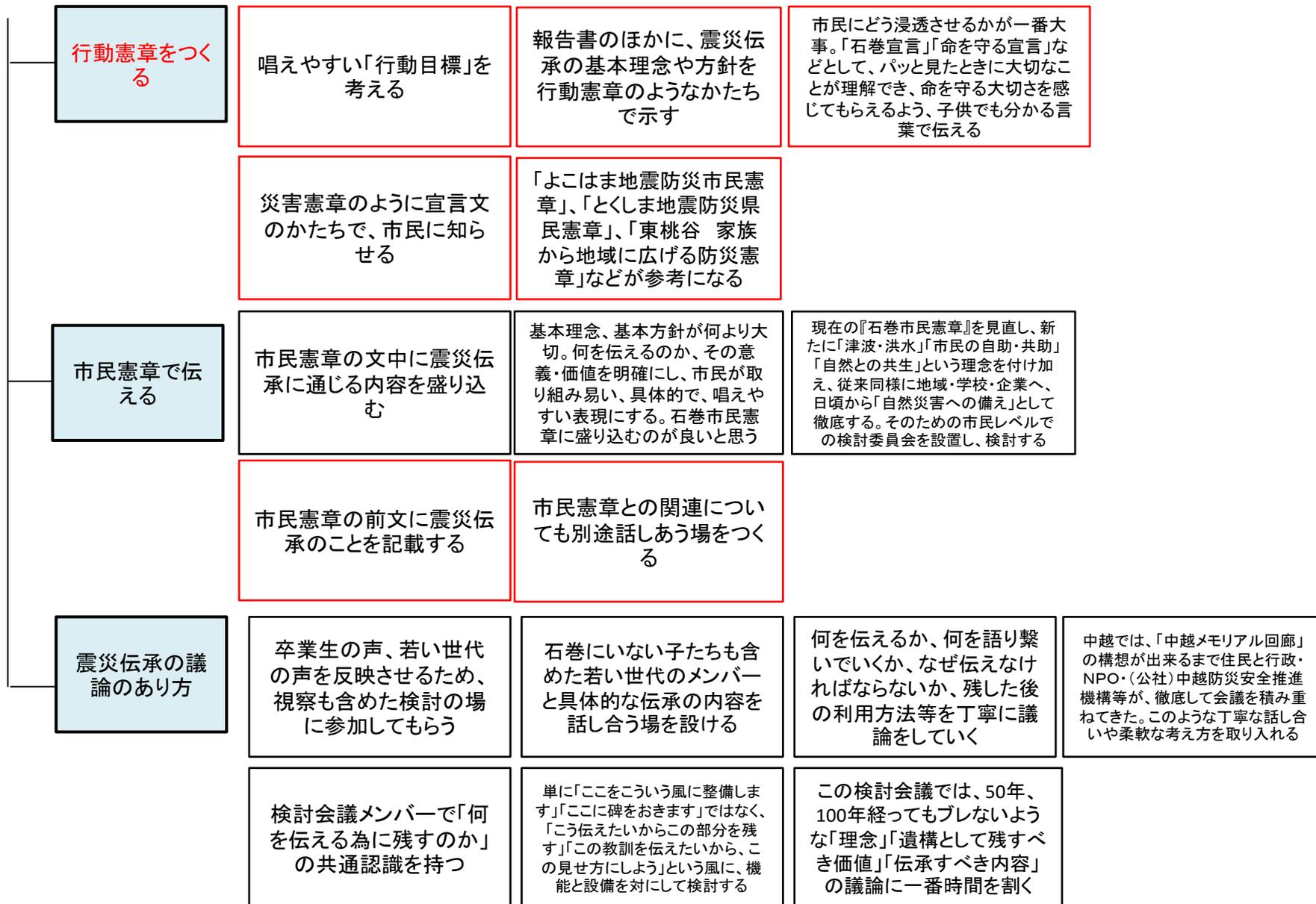
1. 震災伝承の理念の考え方

<p>理念の枠組みを整理する</p>	<p>理念を考えるにあたり、目的、内容、主体、対象、方法、この枠組みでまとめていく。こういう物を、各団体、語り部をやっている方々から情報収集をし、会議で全部を付き合わせていくと最大公約数が見えてきて、そこから目的、内容、方法、全てを見て検討する</p>	<p>既に拠点的に活動している所の場づくり、伝承の活動、外への発信の取り組みを把握し、この3つの枠組みを体系化して整理する</p>			
<p>概念から考える</p>	<p>震災伝承という概念とは何かを検討する</p>	<p>東日本大震災に於ける「震災」の定義を明確にする</p>			
<p>何のために伝えるか【目的】</p>	<p>未来に生きる子どもたちや今を生きる人たちに、それぞれの地で防災について考えてもらうために震災を伝えていく</p>	<p>祈念公園、伝承施設、プログラムなどがあることで、次の災害で亡くなる方を一人でも減らせるように、震災を伝えていく</p>	<p>起きた悲劇を伝えて二度と同じ悲しみを生まないようにするため、震災を伝えていく。自然災害への対策、起きたことの恐ろしさを体で感じられるように残していく</p>		
<p>誰に向けて伝えるか【対象】</p>	<p>後世へ、全国へ、全世界へ震災を伝える</p>	<p>学校教育に携わる人へ伝える</p>	<p>みらいの人、体験していない遠くの人へ伝える</p>	<p>次の世代の人へ伝える</p>	
	<p>未来に生きる人たちに・今を生きる人たちに「自分の命は自分で守る」ことを伝え、「自分で判断し行動する子」を育成する</p>	<p>世界へ「情報発信」する</p>	<p>今後、津波被害が懸念される地域をターゲットに啓蒙活動を行う。東南海地震津波が起こった後は、石巻は忘れられてしまいそうなので石巻の経験を活かしてもらう</p>		<p>地球規模で自然災害のことを発信する</p>
	<p>孫子の代まで伝えていく。受け止める人があつての伝承である</p>	<p>今の世代へ伝える、ということを示す。空間と時間はオーバーラップして物事は伝わっていく</p>		<p>「自分たちの命を守る方法を知り、行動する人をたくさんつくっていく」など、主体者を定義する</p>	

1. 震災伝承の理念の考え方

<p>伝承の担い手 【主体】</p>	<p>思いと覚悟を持って、後世に伝えていく人がいなければならない</p>	<p>最終的には地元の人・体験者が伝えていく</p>	<p>何をもち「語り部」とするか、関係者の意識共有をする機会をもつ。是非、広島等、語り部の「覚悟」や強烈なメッセージ性を学ぶ機会が欲しい</p>	<p>住民の多くが「将来に伝えなければならない」という強い思いを持つことが必要。かつその思いを形にするための組織、震災のメカニズムの分析、将来的な対応策等の研究を行う学術研究機能を備えた(神戸の防災センターのような)施設をつくる</p>
	<p>継続性のある伝承のためには、物より人、組織を大切に</p>	<p>思いを持って行動する人が震災伝承を担う</p>	<p>復興祈念公園の計画では既に市民活動の重要性が位置づけられているが、遺構の整備計画策定にあたって、実際に伝承活動の担い手となる地域の町内会や団体の参画が得られる形とする</p>	<p>民間だけではなく、石巻市からも、行政の立場での苦労や教訓を伝える担い手が出てくる。石巻市職員が乗り越えてきた多くの課題や教訓を日本各地の行政職員に知ってもらうことは、日本全国の多くの命を救い、災害後のスムーズな行動につながる</p>
<p>南浜の拠点の 理念・あり方</p>	<p>国営公園では市内各地の状況も網羅し、学術的な成果も含め、世界的な規模で発信する</p>	<p>ハードとソフトの議論を対立させず、(業者任せでなく)自分たちで考えて施設を作り上げるプロセスを大切にする</p>	<p>南浜では、東日本大震災の全般的な被害状況、宮城県の被災状況、石巻市全体の被災状況を伝える</p>	<p>祈りの場であり、市民が楽しく活動する場ともなるような祈念公園にする</p>
	<p>祈念公園は立地上南浜の地域性を踏まえたものになるが、石巻のみならず、宮城県を代表する震災伝承の場として整備する</p>	<p>国営公園では市内各地の状況も網羅し、学術的な成果も含め、世界的な規模で発信する</p>	<p>最大被災地として、東日本大震災の全体像を伝えていくような役割を担い、県を代表する公園として県内の沿岸他市町の被災のことも伝える</p>	<p>祈念公園の中核的施設は市外の方にも来てもらえる県を代表する施設にする</p>
<p>地域の伝承の 場の理念</p>	<p>地域の人で震災を伝える施設をつくっていくことを明示し、実践する</p>	<p>拠点が備える機能として、地域の住民が代々活動に携わりながら次の世代に伝えていくような「地域に根差した伝えるしくみ」と、行政がそれを継続的にバックアップし守っていくしくみをつくる</p>	<p>石巻市域で広く住民や遺族の要望・意見を聞きながら、「命のきずな」として「悲劇の場所」「大切な記憶」となりえる地点を増やし、「太いきづな」へと紡いでいく</p>	<p>伝承内容や方法は被害規模や被害内容で大きく違ってくるので、統一した伝承方法は難しい。各地区の伝承方法(語り部)を実際に聞き、良いと思われるところを取り入れる</p>
<p>伝承対象地 域・施設を検討する</p>	<p>石巻全域で考えていくのか、分けていく事も可能なかどうかを検討する</p>	<p>震災遺構周辺は取り上げるに意味があるが、それが石巻の震災の全容を示すものでもない。水産都市石巻の視点からとらえ、旧北上川東岸の湊・渡波地区も取り上げる</p>	<p>日和山、門脇、大川ばかりではなく、湊、渡波のような津波被害の大きな地域についても伝承をする</p>	

1. 震災伝承の理念の考え方



2. 伝承する内容

伝承する内容

伝承する内容に関する方針

自然の偉大さ、人間の限界、あの日までの日常、あの日にとんでもないことが起きたこと、あの日からの苦悩など、大変なことがたくさんあったのだということをそのまま丸ごと伝える

事実は事実、不明なことは不明なこととして事実をすべて挙げ揃える(例えば学校管理下でなくとも小学生の中に自宅に帰宅して亡くなった子どもたちがいたことなども含めて)。そうでなければ、後世に伝承していく意味もないし、訴える力も弱まる

各場所で何をテーマにするか、関係者で共有する

・「人間と自然とが、どう共存・共生し生きていくのか?」さらには「地球環境問題」ともリンクさせながら・巨大津波(歴史津波)を地球規模で捉え・学術研究を推し進める「東北大学」とも連携を持ちながら・世界的な視点での大きな「理念」「視野」でもって・震災で得られた様々な「知見・経験・研究成果・情報」、「歴史・風土・伝統芸能・食文化・祈り」などを多面的に全世界中へ、アピールする

何故石巻はこれだけ被害が大きくなったのか、過去はどうだったのか、ではどういう取り組みをするのか、という視点を入れていく

震災前の地理、歴史、人々の生活、防災の方法について

津波の悲惨さばかりではなく、何年前にはこういう津波があった、地震があったという歴史的な事も伝えていく

昔、南浜では人々はどういう暮らしをしていたのか、津波に対して普段からどんな心掛けをしていたのか、人々の暮らしも含めて、津波の恐ろしさを伝える

南浜について、津波だけの災害の悲しみだけを伝えるのではなく、生活基盤そのものを世界に向けて情報発信をする

石巻の地理と歴史を教え、こういう地域だったので、津波が来たという事を教える。地域ということを考えながら伝承していくという視点を、石巻市の伝承委員会が持ち、50年後、100年後に繋げていく

今回の東日本だけではなく、過去の歴史背景も展示する。大正2年の話は今のうちに記録しておかないと伝えていく人はいなくなるので、そういう資料も収集し、一連の流れで捉えていく

集団移転した所は地図から地名が消えてしまうため、被災した地名を「何丁目跡」というような形で地図に表記をして残す

「何を伝えるのか」「どう伝えるのか」を明確にし共有する。土地や建物、財産、人(家族や親戚)、地域環境(人口流出や生活環境の変化)

被災前のことや街のなりたち(どういう経緯で街が大きくなり被害が拡大したかなど)を伝える

津波被害について

街歩きをしたときに、津波の高さと距離、浸水域というものを見て分かるようにする

広島原爆・神戸の大地震に対し、津波被害のあった石巻では「津波の恐ろしさ」を前面に出して訴える

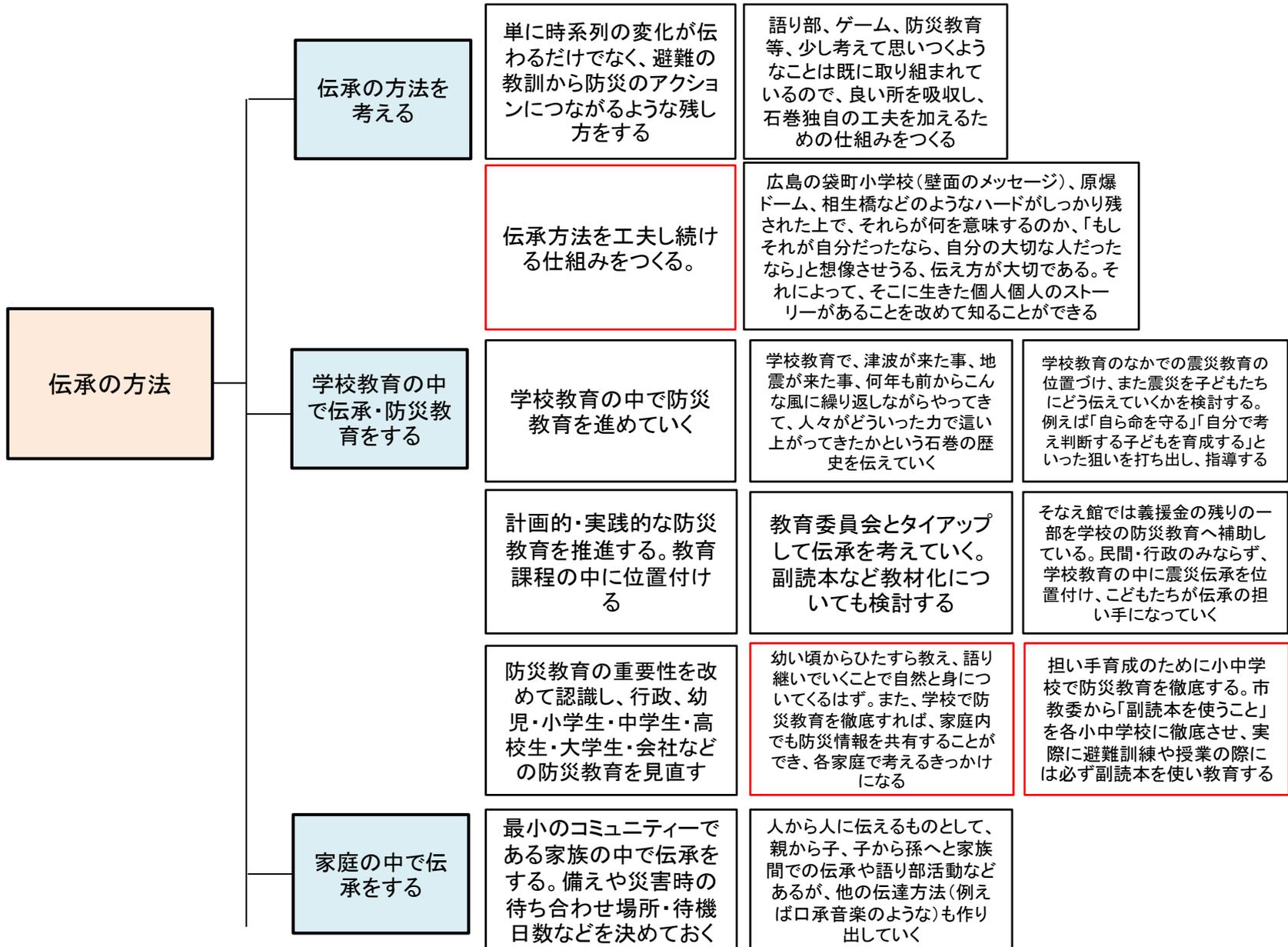
2. 伝承する内容

<p>市内各地の被害状況について</p>	<p>南浜は火事の被害が大きくて被災が大きくなった地域、直接的な海からの津波によって被害が大きかった地域、大川のように川を遡上した波での被害が起きた地域があり、被災原因の違いについて伝承する</p>	<p>一般的に、津波大火という概念で言われているが、門脇大火である。言葉の使い方自体も、概念が違ってくるので、門脇大火という言葉で、概念として捉える</p>	<p>門小だけが、大火の震災遺構ではない。焼けた大木、黒くなった石垣が黒くなっている。今回の震災工事で市営住宅を建てているが、その背後にも、家がぶつかって燃えて、擁壁に焼けた痕跡があった。そういう物は本来保存する</p>	<p>知らないと伝えようがないので、震災のときそれぞれの場所でどんなことがあったのかを伝える</p>
<p>災害時の支援活動や市民の動きについて</p>	<p>今回の災害で石巻市の災害医療が大きく変わったことを残し、伝承する</p>	<p>石巻市は最も多くのボランティアやNPOの支援を受けたにも関わらず、外部からのこれまでの支援に対する公式の御礼の機会すら設けられていない。今後、石巻を訪問する多くの方々は「支える／支えられる」のどちらの立場でも学びを得てもらいたい。被害の実情だけでなく、支える側の貢献も伝えられるような計画をする</p>	<p>震災当時、町内会などの市民コミュニティで起こったことも伝える</p>	
<p>震災後の生活について</p>	<p>津波の被害にあった方、亡くなった方が今、メインで議論されているが、財産を失い、集団移転している方々も犠牲者であることを含めて伝承をする</p>	<p>震災後の生活の変化を、ネガティブなことも含めてきちんと伝える</p>		
<p>支援に対する感謝</p>	<p>震災支援を全国や全世界中の人々から支援を受けた立場として、その恩返しに被害の現状を後世に残すことだと強く感じました</p>	<p>支援してもらったことへの感謝を伝える</p>		
<p>震災の教訓(失敗を検証し、伝える)</p>	<p>震災を長く伝え、次の命を守る行動につなげてもらうには、思い切って「失敗」を伝承してゆく</p>	<p>震災時の失敗と成功を自分たちで検証し、伝える</p>	<p>行政の被害状況、できたこと／できなかったこと、その理由についてもきちんと伝える</p>	<p>大川小学校の事故を検証し、「なぜ起きたのか」「どうすれば防げるか」を今後、学校防災に活かす</p>
<p>日和幼稚園児6人が亡くなったという事実・教訓は重い。「若い命が津波で失われた」という事実・悲しみを行政も積極的に受け止め、多くの人たちが車と共に山際に打ち付けられ、亡くなった津波大火(門脇大火)を伝承する意味でも「メモリアル回廊」に組み込む</p>				

2. 伝承する内容

<p>自然災害のメカニズム、客観的事実</p>	<p>世界の人の命を守るために、津波のことだけでなく、気候変動などについても伝える</p>	<p>石巻市には世界に誇る金華山漁場、東日本大震災の震源地がある</p>	<p>津波に関する新しい知見を、分かりやすいかたちで取り入れる。例えば堀込先生の「地形によって変化する津波」</p>	
<p>命の大切さ、命を守るためには</p>	<p>「命の大切さ」「大災害が発生したとき命を守るためにどうすれば良いか」を学んでもらう</p>	<p>「命の大切さ」のほかに「命を守るための行動」も伝える</p>	<p>未来に生きる人たちに・今を生きる人たちに「自分の命は自分で守る」ことを伝え、「自分で判断し行動する子」を育成する</p>	<p>過去の災害事例の見学というよりも、「今後起こりうる災害」に対して「災害前に考えることの大切さ」「共有することの大切さ」「災害が起きた時の情報収集と整理・危機予想」をすることによって、「守られるべき命があった」という事から「命を守る行動とは」を外から来た方々はもちろん、石巻市民にも改めて考えることが出来る場所にする</p>
<p>防災計画、取組みについて</p>	<p>防災教育の重要性を改めて認識し、行政、幼児・小学生・中学生・高校生・大学生・会社などの防災教育を見直す</p>	<p>震災後の石巻市による防災、減災対策を検証する</p>		
<p>復興状況について</p>	<p>千年に一度と言われる震災を体験した者として、防災教育の観点から、自分たちがどのように立ち直ったかを後世に伝える</p>	<p>山古志の「おらたる」のように、石巻でも元気にやっていること、プラスのことも伝える</p>	<p>「何を伝えるか」に「追悼」「復興（ハード面、心の復興）」も入れる</p>	
<p>日常（平常時）のこと</p>	<p>聞いた人の行動にもつながると思うので、震災後に感じた「普通の暮らしの有難さ」も伝える</p>	<p>日常生活のなかで個々人の内面に醸成された意識と避難行動との関連を検証し、伝える</p>	<p>防災と日常はつながっているのだということを、「自分たちごと」として、当事者意識を持って伝える</p>	
<p>伝承の背景にある思い</p>	<p>「なぜここを遺したのか」と考えるであろう未来の人たちに、ここに遺した人の思いも含めたメッセージを伝える</p>			

3. 伝承の方法



3. 伝承の方法

<p>日常生活の中で慣習として伝える</p>	<p>広島、長崎のようにサイレンで震災発生の時刻を知らせる</p>	<p>「はだしのゲン」や「ガラスのうさぎ」のような絵本で、地域に育つ子どもに身近で当たり前のものとして震災を伝える</p>	<p>終戦から70年が経つ今、広島では「体験者がいなくては来る意味がないのでは」という声が上がってきているが、体験者がいなくなっても伝わるように、生活の中で慣習として伝えていく</p>	
<p>地域の活動の中で伝える</p>	<p>地域で発生した取り組みを大切に、地域に根差した活動を数多く続けていくための、人が介在するしくみをつくる</p>	<p>地域と連携し、複数の避難経路の検討・避難所の運営・防災訓練の実施などを行う</p>	<p>山古志の「ふるさと会」はメンバーから満足感が伝わってきた。訪問者数、売上、報酬、メンバー数、感じられる「生きがい」等が、良いバランスで今の規模になっているものと思う。石巻でもこうした自主的かつ継続的な活動を生み出す仕組みをつくる</p>	
<p>行事で伝える</p>	<p>木籠メモリアルパークでは地域住民が他地域の人たちの力を借りて震災伝承、施設の維持・管理、地場産品の販売など「地域おこし」も担っている。石巻でも地域ごとに、こうした活動に取り組む</p>	<p>「救えなかった命」に対して追悼行事を行う</p>	<p>石巻では「世界津波の日」には特に何も行われなかったが、ここに焦点を当てて世界へ発信する</p>	
<p>語りによって伝える</p>	<p>地域の人たちの防災意識を高めに行く上でも、震災遺構の門小、大川小の「校庭」を地域の「防災訓練」の場として積極的に活用し、生活の一部として「行事化」する</p>	<p>ハード面も大事だが、ソフト面はより重要である。語り部の質で記憶に残る度合いが違うので、伝える「質」を高めていく</p>	<p>感情を揺さぶる「語り」が必要である</p>	<p>震災遺構という施設で視覚情報として訴えるのに加え、適切な説明によって、認識が変わるような感動を与えることで伝えていく</p>
<p>街の中に表示を設ける</p>	<p>浸水域を示す看板を市内全域どこにでも設置し、子どもの関心、危機感を喚起し、防災意識を高める</p>			

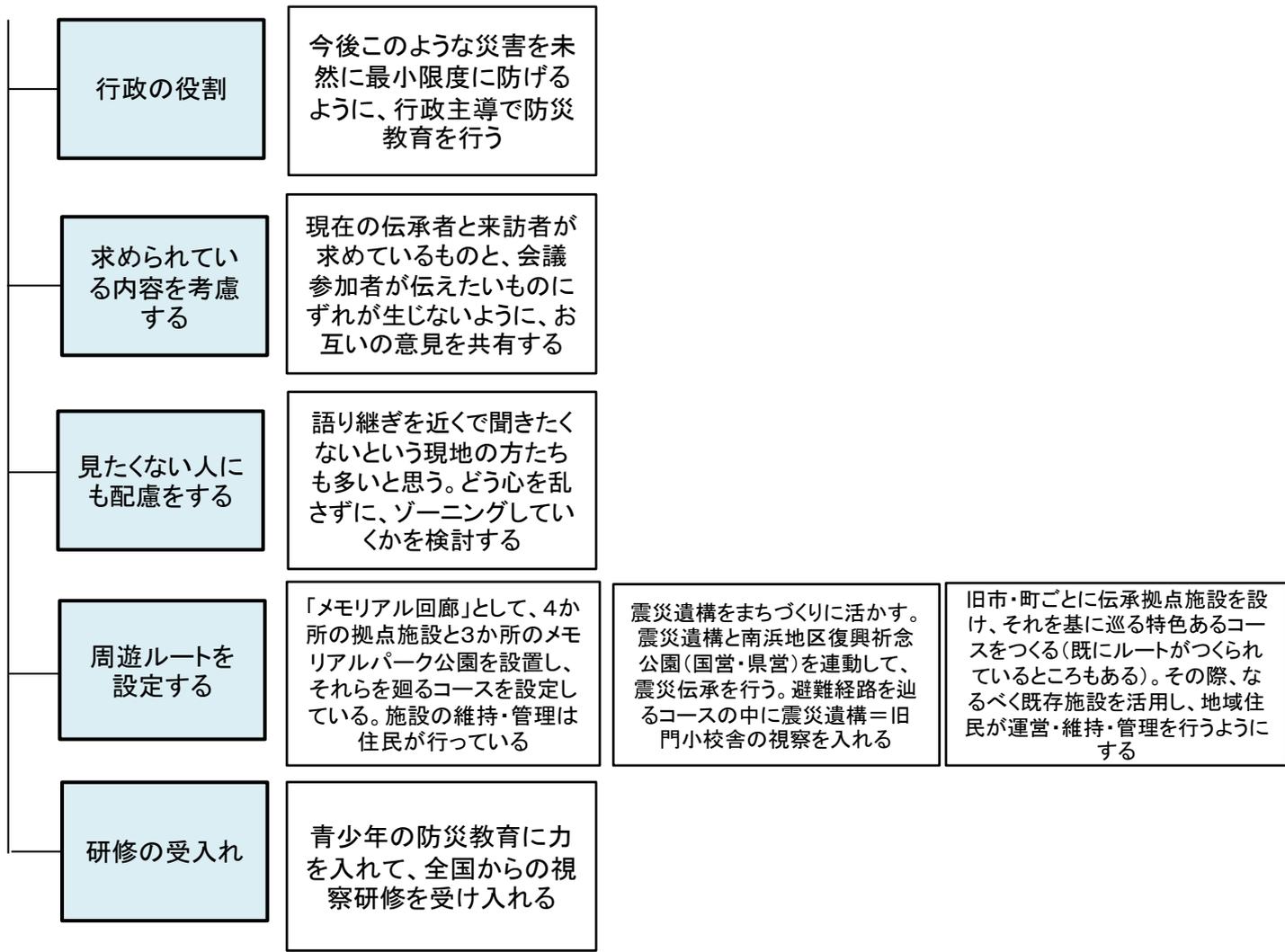
3. 伝承の方法

<p>記念碑で伝える</p>	<p>何百年も伝承していくために、記念碑を建てる 桜の木を植える</p>	<p>何百年も伝承していくために、文字としてきちんと記録しておく。行政でやるのも一つのやり方だが、大学で、石巻だけではなく沿岸全部、太平洋沿岸全ての集団移転している集落について、きちんと学術調査をし、記録保存をする</p>		
<p>情報収集・記録・保存する</p>	<p>アーカイブ事業を展開するにあたり、活用方法を明確にする</p>	<p>神戸のように、人をたくさん雇って一気に資料を収集する。地域や目的にまで踏み込んで情報収集を行う</p>	<p>被災者が健在の内に、地域の歴史・文化をきちんと「記録保存」する</p>	<p>被災した「教育関係資料」を保存する</p>
<p>情報収集・記録・保存する</p>	<p>東日本大震災の記録をアーカイブするサイトは沢山あるが、著作権・肖像権の処理に相当に手間がかかるため、ソフト面で十分な準備を行う</p>	<p>長岡の「きおくみらい」では震災関連の書籍を、山古志の「おらたる」では新聞のスクラップを収集・展示していた。映像も収集しているだろう。石巻市でも各学校図書館、地区集会所などでそうした資料を収集・展示する体制を構築する</p>	<p>既存の施設では、見たくないという声に配慮して、あまり資料の無いところもあるが、情報を求めている人には出せるように用意をする</p>	
<p>学術分野において発信する</p>	<p>何百年も伝承していくために、文字としてきちんと記録しておく。行政でやるのも一つのやり方だが、大学で、石巻だけではなく沿岸全部、太平洋沿岸全ての集団移転している集落について、きちんと学術調査をし、記録保存をする</p>	<p>世界に発信するために、石巻市で国際会議を開催する</p>		
<p>地理的情報とあわせて伝える</p>	<p>中越ではパークや施設が「メモリアル回廊」の一部として位置づけられていることで、その存在や設置の背景が周知される仕組みになっている。それを見習ってしくみを考える</p>	<p>被災地に訪れる人の多くが震災当時TVの放送(報道)を見ていたと思われるが、その映像がどの場所なのかを意外と知らない場合がある。それを知ってもらうためには、地図+情報(位置状況)の展示が有効</p>		
<p>模型で伝える</p>	<p>3D「立体地形図」により「石巻絵巻」を制作する</p>	<p>石巻市は「海・川・山・平野・島」と自然地形・産業・都市部と農村・浜と変化に富んでいる。3D模型「石巻バージョン」で石巻市域の被災状況・自然・歴史・産業・観光などを紹介する</p>		

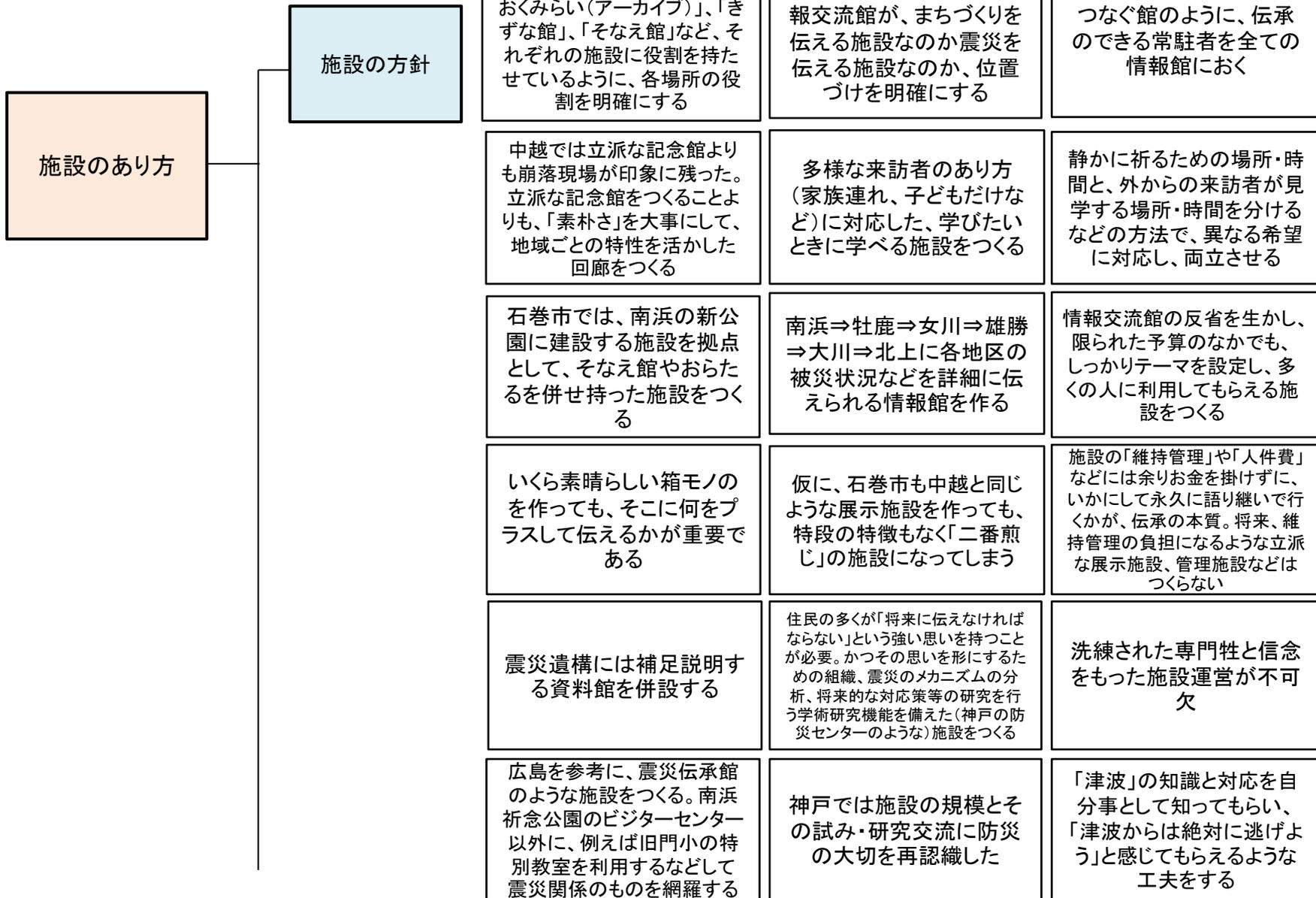
3. 伝承の方法

デジタルメディアで伝える	複数の拠点を訪れる場合、移動中(たとえば「門脇・南浜～大川小」間など)に見られる概要、経緯説明の学習用DVDを用意する	「きおくみらい」の「床の地図+タブレット=詳細情報」の展示はシンプルだが全体像の把握が可能。石巻では女川～石巻～東松島を網羅し、各地区の津波の高さ&被害状況を見るようなものが考えられる		
震災時のことを再現する	そなえ館の「3時間後の部屋」では中高層住宅の食器や家電が散乱した台所が移設展示されており、直下型地震の恐ろしさを物語っている。このように、震災を再現できる物品の収集・保存を行う	「そなえ館」での地震の揺れの疑似体験はインパクトがあった。その津波版(映像+音で津波に流される疑似体験ができるもの)を設置し、津波の怖さを伝える	災害時に「発災後・瓦礫の上を歩くのは危険である」と感じた。瓦礫の上を歩く疑似体験ができる設備をつくる	石巻でも「津波」を何らかの形で可視化したり体験できるモノを置く
震災遺構で伝える	広島では街全体は被災し、遺構が空間的・時間的に「島のように」残った。伝える人を後押しする遺構を、現地で(博物館のようにせず)できるだけ多く、そのまま凍結して残す	言葉だけでなく、目から訴える震災遺構を通し伝える	その地域の過去の災害歴史も伝える場として遺構のこす	遺構によってその地域の過去の災害歴史を伝える
	震災遺構として遺す旧門脇小校舎と大川小旧校舎には語り部が常駐する	震災遺構という施設で視覚情報として訴えるのに加え、適切な説明によって、認識が変わるような感動を与えることで伝えていく	震災遺構を線でつないで各々の遺構の特徴を説明する	観光で沢山の人が訪れる場所に震災遺構を残す
	石巻ではほとんどの場所が津波被害を受けているので、広範囲にわたって震災遺構を遺す	広島と神戸を比較すると、遺構が多く残っている方が人々の関心が高く、多くの人の来訪に繋がっている様に感じたので、遺構を多く残す		
震災遺物で伝える	震災復興の中で出てきた遺留品が津波の伝承、証言者であるので、そういう物も含めて、拠点の中に重要な核として位置付けていく	語りだけで何年も語り継いでいくのは難しい。色々な資料や現物をきちんと保存し、それを語り継ぐという様なやり方をしていく	震災の時の物(遺品等)を展示する資料館をつくる	

3. 伝承の方法



4. 施設のあり方



4. 施設のあり方

施設運営の担
い手

「メモリアル回廊」として、4か所の拠点施設と3か所のメモリアルパーク公園を設置し、それらを廻るコースを設定している。施設の維持・管理は住民が行っている

大川・門脇・復興祈念公園・追悼や伝承をすべて担当する行政の組織が必要であり、あと5年で体制を作り上げるには専門的に携わる人の存在が欠かせない

山古志の「おらたる」を案内してくれたスタッフから地元への愛着が伝わってきた。地域の人を中心となり施設を運営する

施設があるだけでなく、そこで伝える人が大事

展示のあり方

中核施設は、地域防災の計画・取組例など来館者が自分の家庭、地域の防災に向け具体的なイメージをもてるような内容にする

ありのままを感情とともに伝える、感情が沸き立つような展示があると良い

30年前に見た広島「黒い爪」が強く印象に残っていた。一つ一つ展示が持つ意味、見る人に何を感じてもらえるかを考えた展示をつくる

中越の「そなえ館」のように、震災発生から時系列で展示を行う

「きおくみらい」での床一面の航空写真から記録映像をipadで検索・閲覧できる取り組みは画期的だが、時間がなければipadをちよつと操作する程度で終わってしまう。それよりも、「おらたる」のような写真拡大と説明展示のほうが老若男女すべてを対象にしており親切である

デジタルものと伝承活動の相性が良いのは事実だが、大多数の視察者は、たくさん情報があっても数か所しか見ないだろう。「いかに見せるか」と、「それを、どのように次の命を守る行動につなげるか」を考慮した伝承の方法を考える必要がある

「きおくみらい」のシアター映像は、星、地域的な広がり、人のフォーカス、など、気持ち良く視聴できる仕上がりになっている。業者に丸投げではなく、震災を伝える当事者の間で、石巻ではどんな映像をつくるか検討する

ガラス床の下に街並み復元模型を置くなど、床の活用方法を考える

山古志の「おらたる」のように、震災当時の状況を写真で大きく展示する

「人と防災未来センター」の常設展示は資料が多すぎる。経験や教訓を分かりやすく展示する必要がある

「モノ」の展示にあたっては、「数ではなく質(ストーリー)」を重視する

入口に「生きた魚を水槽に放ち、三陸の海を再現」する。その三陸の海が猛威を振ったというストーリーが出て、石巻は魚の町であることもアピールできる

神戸の「人と防災未来センター」は数年前と比較して、閲覧資料がデジタル化されていたが、「紙資料をスキャンしただけ」という感じであった。ICTをより有効活用した展示ができるよう、訪問者やスタッフの意見を柔軟に取り入れる仕組みをつくる

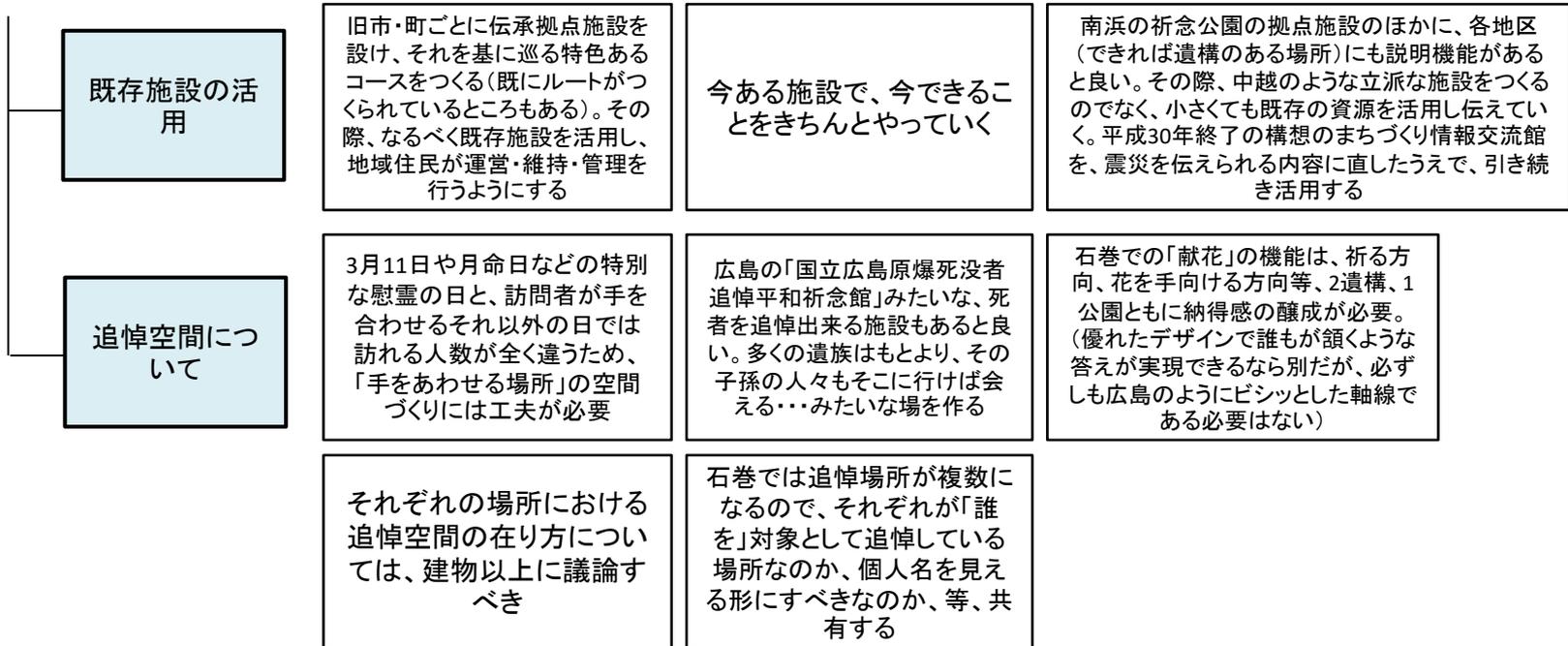
見せ方のアイ
ディア

神戸の東公園には灯りがあり地下にも水盤が使われている。「がんばろう！石巻の会」では灯りをともしているが、石巻には「水」の活用例はない。空間を活かすために、「水」、「火」を効果的に活用する

4. 施設のあり方

必要な設備・機能	360度カメラや3Dカメラなどを使用した立体映像と模型を融合させ、地域全体の模型と共に避難経路や避難状況を「見える化」出来る展示室(体感室)を整備する	自主財源の確保のためには、物販を行う必要がある	長岡の「きおくみらい」のiPadを使った情報検索機能は素晴らしい発想だが、「ここまで必要か」疑問である	各地区の情報館には、各地区の被災状況などを詳細に伝えられるものを設置して、防災についての講演や勉強会が出来るホールも作る
	災害時に「発災後・瓦礫の上を歩くのは危険である」と感じた。瓦礫の上を歩く疑似体験ができる設備をつくる	石巻の遺構、公園は、「圧倒的な被害」「多くの犠牲をふまえた教訓」といった、非日常体験を与える機能が求められる。通常と切り離れた別空間で訪問者の頭を切り替えてもらうのに効果的な設備として、シアタールームを各遺構、施設に設置する	祈念公園にしろ、遺構の説明スペースにしろ、教育旅行での視察受け入れを想定した施設では大きさの違う会場が複数必要になる。少なくとも祈念公園と門脇小を(出来れば大川小も)一体的に考えて、複数校を時間差で視察受け入る場合のローテーションや、部屋の大きさを検討する必要がある	
	震災の記憶フロアとして映像で伝えるシアターを作る	「そなえ館」では震災を若い人に伝えるための施設として活用されている。伝承施設内に、被災状況を知らせるだけでなく防災学習体験の場をつくる	見学者の駐車場について検討する。①校庭内の一部を駐車場に、②石巻南浜津波復興祈念公園の駐車場から歩いて来てもらうなど	「そなえ館」での地震の揺れの疑似体験はインパクトがあった。その津波版(映像+音で津波に流される疑似体験ができるもの)を設置し、津波の怖さを伝える
	災害は日常とかけ離れた状況であるため、訪問者に気持ちを入れ替えてもらうには、石巻でも、シアタールームと映像は非常に有効である	プロジェクタ・スクリーンで説明するセミナールームのようなスペースをつくる	きちんと分離された部屋で、風や寒さに影響されずに語り継げるスペースを場所場所に設置する	
	地域住民の交流の場づくり	地域の人が日常的に集まり活動しながら、外からの来訪者とも交流できるような施設を各地域につくり、地域住民自身が運営を行い、それをサポートするような体制を整える	中越の「郷見庵」のような、地域の人たちの交流の場であり震災伝承の場となるような施設をつくる	
	立地の決定	被災した場所に伝承情報館があるべきなので、河北情報館は被災した大川小学校に移設をし、大川小学校被災の情報を公開する	現在施設がある場所を少し変えることも視野に入れ(例えば牡鹿では鮎川浜ではなく震源地に近い御番所公園に拠点を移すなど)各地の拠点を つくる	

4. 施設のあり方



5. 組織・体制

組織・体制

組織をつくる

現在は各地区で地元住民や遺族が無償で語り部をしている状況だが、組織(公益社団法人など)を立ち上げて運営していく

中越での震災伝承の議論においては(公社)中越防災安全推進機構が中心的な役割を果たしたという。このように専門的見地から、リードできる組織体をつくる

視察先の広島、神戸、中越でもソフト面は「公益〇〇機構」のような組織が担っている。石巻でも「市全体で(場合によっては県レベルも)連携してソフト面を推進するための組織づくり」が不可欠であり、その連携組織体と行政型の統一窓口が形成されて初めて、「公園連携」、「記録収集・保存・利活用」などの具体的プロジェクトに向けた協働・実施体制ができる。

市に震災伝承の専門部署ができることをこの計画で宣言する

組織運営の方針

中越のように、施設の「維持管理」や「人件費」などには余りお金を掛けず、いかにして永久に語り継いで行か、伝承の本質である。将来、維持管理の負担になるような立派な展示施設、管理施設などはつからない

人材育成、担い手を支える仕組み

残された施設の真意を伝えるには、語りの高度な専門性と道具立てが不可欠。語り部を養成するとともに、運営方法を検討する

広島・神戸ではリアルな経験者の話の深さと決意を感じることができた。ハードの整備も重要だが、伝える人材が一番大切であり、語り継ぐ次の世代も育てていく

大学を卒業するときに、伝承の方向性が変わらないように、後輩への引き継ぎをしっかりと行う

未来永劫、伝承する「仕組み」を、学校・地域・家庭・行政・企業など、多方面にわたって構築していく

伝承活動を次世代に継続していくためにも、若いスタッフが有給の仕事として関わられる仕組みをつくり、予算を付ける

地元の伝承者たちの声が反映されていく事が大事なので、NPOや個人の活動を収集し、拾うための仕組みを考える

独自に勉強会等の活動を継続していくことは大変であるため、市からの援助を仰げるような仕組みをつくる

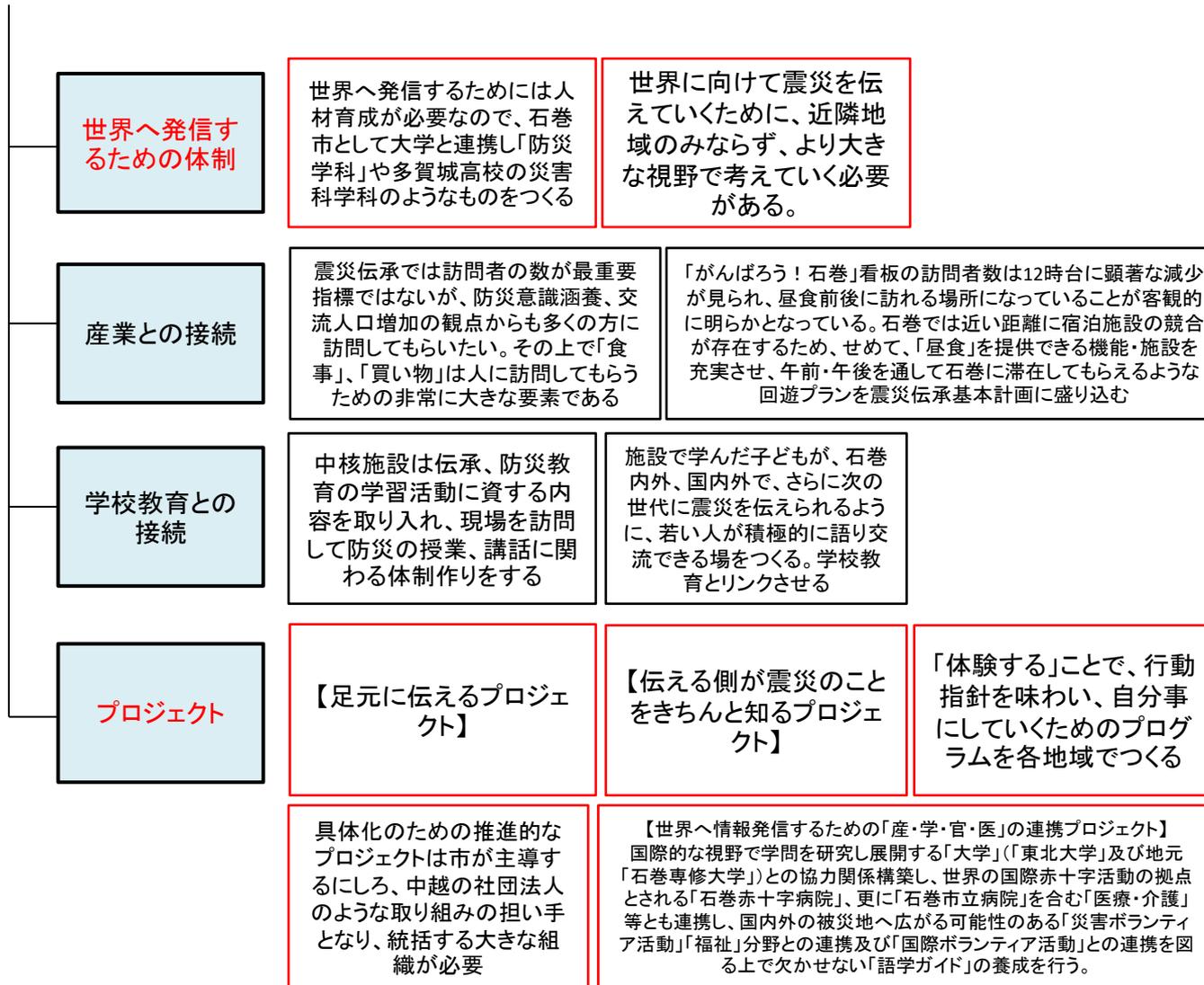
実際に計画、運用された後も、伝承に関わる方々の意見交換会などを行う

単に組織だけをつくっても回らないので、多種多様なひとが、多種多様な受け皿で発信していくことを支持する“仕組み”を作る

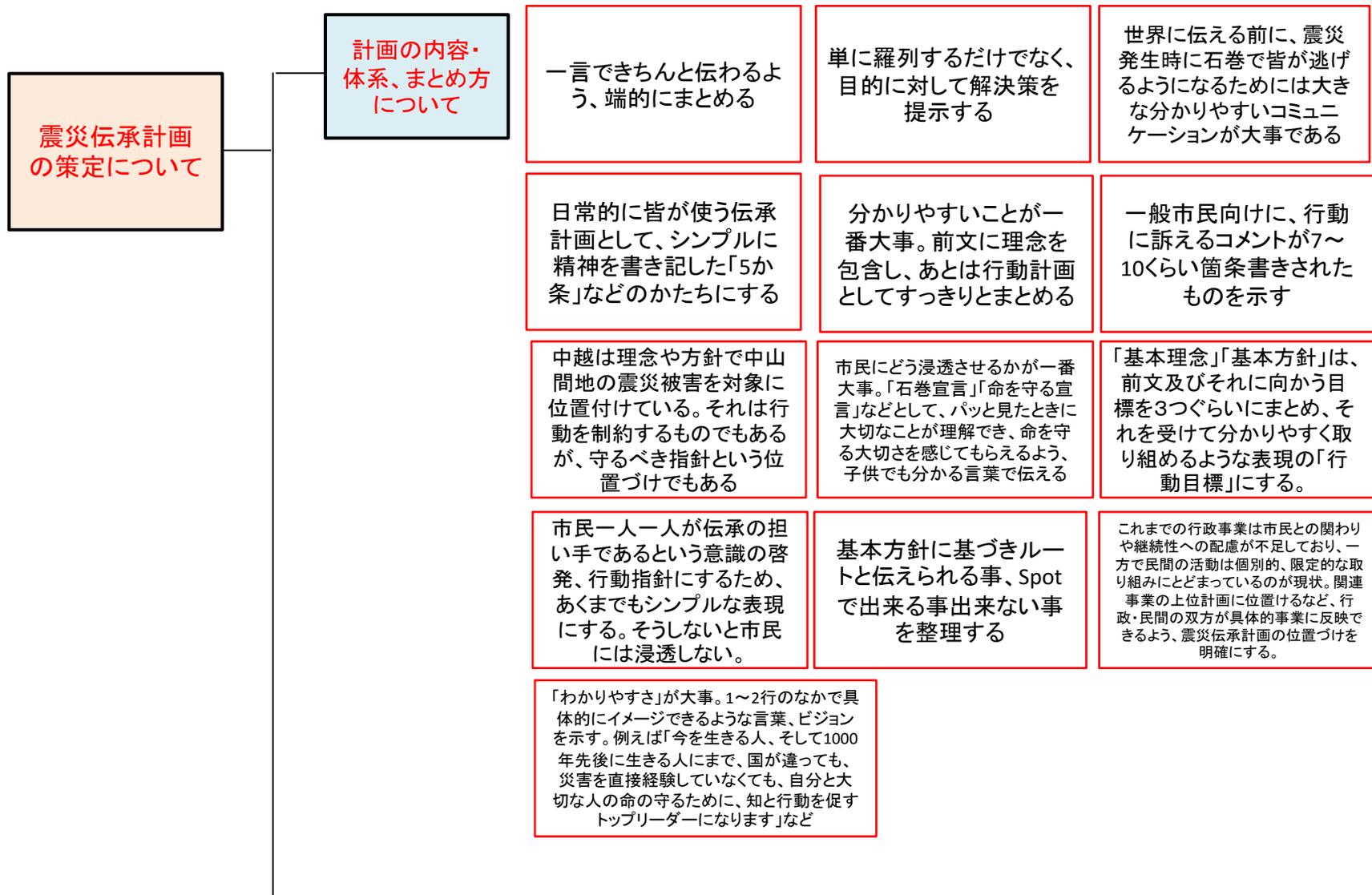
5. 組織・体制

意見を取り入れる仕組み	神戸の「人と防災未来センター」は数年前と比較して、閲覧資料がデジタル化されていたが、「紙資料をスキャンしただけ」という感じであった。ICTをより有効活用した展示ができるよう、訪問者やスタッフの意見を柔軟に取り入れる仕組みをつくる	遺構保存・利活用について、「中越メモリアル回廊」から学び、地元の町内会などへ要望も受けながら、思い切って地元任せ、行政が側面的にバックアップを行う。地元の人たちで運営することで地域の活性化・雇用創出にもつながり、地域としての責任と自覚も育まれる	公園ガイド、施設ガイド、語り部、公園の草花の世話・・・など、様々な市民の関わりがあり得る。予算削減の観点からも、計画段階から各レベルの住民参画の必要性と、その構築支援を想定しながら進める	
施設間の連携体制	資料館、研修施設、慰霊碑などと防災教育、語り継ぐ人の活動とを連動させる	震災遺構(旧門小校舎)と南浜地区復興祈念公園事業と連動して、震災伝承を行う	各情報館で連絡を取り合える連携体制をつくる	
	広域圏でも連携し、石巻市が中核となって、石巻地域独自の“命のきずな”を構築していく必要がある	「復興祈念公園」「まちなか伝承館」「文化施設」「福祉施設」「慰霊碑」と、POなどとの連携や調整も行う	震災遺構、資料館、研修室、慰霊碑などを連動させる	
連携・役割分担	近隣の東松島市や女川町との連携を取る	「一市九町(一市二郡)」という感覚がある。東松島・女川も併せて震災伝承のあり方を考える	皆が訪れる拠点施設で地域全体のことを把握し、女川、東松島も含めた次の場所へ向かう構造にする。来訪者も時間の調整がしやすい	東日本大震災被災地では沿岸一帯に類似の施設・公園が並ぶことになるが、これらが「バラバラさ」を内外に示す施設群にならないよう、縦割りの行政を超える工夫を行っていく
	南浜だけではなく、牡鹿、雄勝、渡波などについても伝承をする	市内でも地域ごとに被害の状況が異なるなか、地域ごとに役割分担し震災を伝えていく	被災前のことや街のなりたちも含む市全域の情報がわかる南浜の拠点施設と、被害の大きかった各地を結ぶ拠点をつくる	広域圏でも連携し、石巻市が中核となって、石巻地域独自の“命のきずな”を構築していく必要がある。「復興祈念公園」「まちなか伝承館」「文化施設」「福祉施設」「慰霊碑」と、NPOなどとの連携や調整も行う
	丸ごと伝える上では、桃生・河南も必要(河南は2003年の宮城県北部地震でも被害を受けた地域であり、東日本大震災でも津波の被害こそなかったが揺れの大きかった地域である)	見た目の被害のない地域だが、市内各地の連携体制は「中心地」も含めて考える	伝承の体制には石巻市だけでなく、国・県・学術機関も含めて考える	

5. 組織・体制



6. 震災伝承計画の策定方法



6. 震災伝承計画の策定方法

計画策定に関する議論の仕方

どう使うのかを見据えてこれまでの議論を整理し、どうするかで計画をまとめるか考える必要がある

理念や方針の部分では細かい内容については触れず、それを踏まえて展開する段階で具体的なことを出していく

世界に発信するにはどうしたら良いかという視点を持って議論する

そもそもこの会議は、理念や方針を考える場なのか？どこまで権限があるのか？計画の文言なども含めて考えるのならばもっと議論の時間がかかるし、別に会議を立ち上げて行く必要がある

この会議で伝承計画の文章まで決めるのであればはっきり提案してもらい、事前に個々の参加者が用意しておくこともできる

6人くらいのワークショップ形式で、案について検討してはどうか。自主的勉強会でも良い

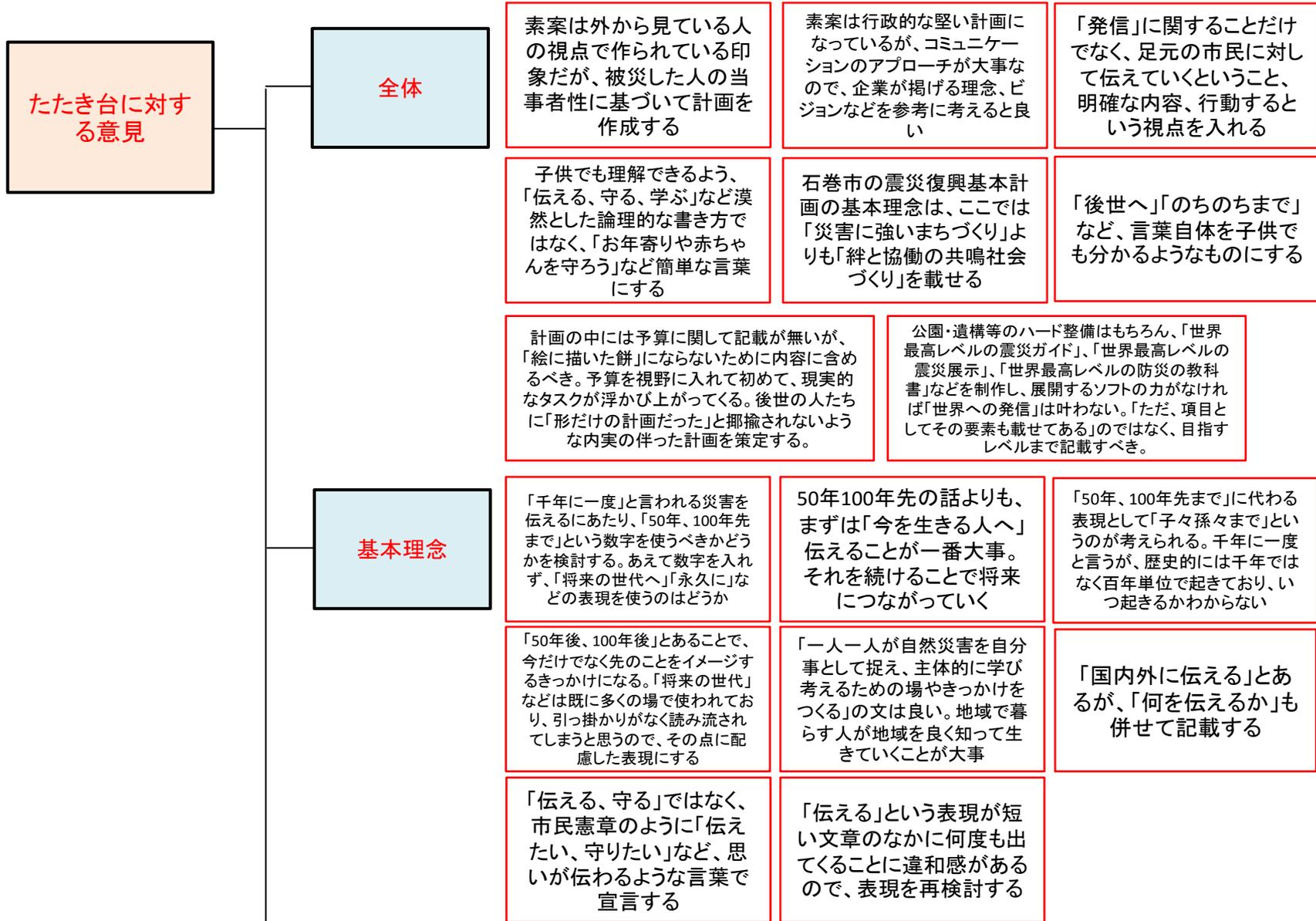
最初の説明では「石巻市は震災伝承計画を策定する。その策定にあたって、震災伝承検討会議を設置し意向や意見を集約・提案していただく」ということだった。なので、あとは市の方で震災伝承計画策定委員会など設けて話し合うことになるか

市に丸投げするのではなく、皆で一緒に計画をつくっていいかどうか。次回や他の機会にワークショップを行い、文言を検討する

たたき台に対して、「こうしたら良いのでは」という意見を出してもらい反映していくのが妥当。案があれば意見シートを提出する

震災伝承計画は市で取りまとめて策定するもので、検討会議参加者の意見、アイデアを反映していきたいと思っている。
次回は市の素案を出す予定

7. たたき台に対する意見



たたき台に対する意見

全体

素案は外から見ている人の視点で作られている印象だが、被災した人の当事者性に基づいて計画を作成する

素案は行政的な堅い計画になっているが、コミュニケーションのアプローチが大事なので、企業が掲げる理念、ビジョンなどを参考に考えると良い

「発信」に関するだけでなく、足元の市民に対して伝えていくということ、明確な内容、行動するという視点を入れる

子供でも理解できるよう、「伝える、守る、学ぶ」など漠然とした論理的な書き方ではなく、「お年寄りや赤ちゃんを守ろう」など簡単な言葉にする

石巻市の震災復興基本計画の基本理念は、ここでは「災害に強いまちづくり」よりも「絆と協働の共鳴社会づくり」を載せる

「後世へ」「のちのちまで」など、言葉自体を子供でも分かるようなものにする

計画の中には予算に関して記載が無いが、「絵に描いた餅」にならないために内容に含めるべき。予算を視野に入れて初めて、現実的なタスクが浮かび上がってくる。後世の人たちに「形だけの計画だった」と揶揄されないような内実の伴った計画を策定する。

公園・遺構等のハード整備はもちろん、「世界最高レベルの震災ガイド」、「世界最高レベルの震災展示」、「世界最高レベルの防災の教科書」などを制作し、展開するソフトの力がなければ「世界への発信」は叶わない。「ただ、項目としてその要素も載せてある」のではなく、目指すレベルまで記載すべき。

基本理念

「千年に一度」と言われる災害を伝えるにあたり、「50年、100年先まで」という数字を使うべきかどうかを検討する。あえて数字を入れず、「将来の世代へ」「永久に」などの表現を使うのはどうか

50年100年先の話よりも、まずは「今を生きる人へ」伝えることが一番大事。それを続けることで将来につながっていく

「50年、100年先まで」に代わる表現として「子々孫々まで」というのが考えられる。千年に一度と言うが、歴史的には千年ではなく百年単位で起きており、いつ起きるかわからない

「50年後、100年後」とあることで、今だけでなく先のことをイメージするきっかけになる。「将来の世代」などは既に多くの場で使われており、引っ掛かりがなく読み流されてしまうと思うので、その点に配慮した表現にする

「一人一人が自然災害を自分事として捉え、主体的に学び考えるための場やきっかけをつくる」の文は良い。地域で暮らす人が地域を良く知って生きていくことが大事

「国内外に伝える」とあるが、「何を伝えるか」も併せて記載する

「伝える、守る」ではなく、市民憲章のように「伝えたい、守りたい」など、思いが伝わるような言葉で宣言する

「伝える」という表現が短い文章のなかに何度も出てくることに違和感があるので、表現を再検討する

7. たたき台に対する意見

<p>基本方針</p>	<p>11月22日の福島沖地震の反省から、実際の行動につながるような内容を基本方針に据える</p>	<p>基本方針には「誰が伝えるか」も入れる</p>	<p>基本方針に「なぜ伝えるか」を入れる</p>	<p>「学ぶ、行動する」の部分では、一人一人の防災能力を高めるという観点をもつ</p>
	<p>「それぞれに異なる被災状況(...)を、そのまま丸ごと伝えていく」とあるが、各地域に共通のものを軸として伝える</p>	<p>現実に伝えることが難しい／伝わらないなかで、どういったら伝わるかを検証し検討し続けていくべきだということも、計画のなかに入れる</p>	<p>基本方針(案)</p> <p>①生きる: 私たちは生命を大切に、今をちゃんと生きるために、当事者性をもって伝承に積極的に取り組みます。 ②個の記憶: そのためには過去の経験に耳を傾けることが大切であることを理解し、2012年からの経験をしっかりと残していきます。 ③知の体系化: うまくいったこと、失敗したこと、それらをおそれず伝えていきます。 ④伝承者: 伝承を代弁したり体系化する活動主体が大切です。市民が日常的にかかわるために中核的に関わっていくための人を育てそれぞれが孤立しないようネットワークをつくっていきます。 ⑤物: 大きな広がりを持った災害であることを想起出来るよう災害の記憶を今に伝えるものを積極的に現地、現形保存していきます。 ⑥更新性: 常に更新されるものです ⑦地域文化の中に位置づける ⑧経済: 経済と連携して豊かに ⑨組織・プラットフォーム: 再生可能なように民・産・学・官が連携する ⑩感謝: 感謝と公共性</p>	
	<p>「丸ごと」「多様に」伝えるために、多様な主体が多様に伝えることを支援し、積極的に巻き込むしくみをつくる、ということがひとつの解決策になる</p>	<p>「誰に伝えるか」という部分で「様々なレベルのコミュニティ」とあるが、基本的には学校で教え、小学生にもわかるような伝え方をしていく</p>		
<p>伝承する内容</p>	<p>「震災前の地理、歴史、生活、防災」のところに、石巻特有の地形、地勢も踏まえて、この地に特有の津波があったことを伝える</p>	<p>「地理」よりも「地勢」の方が表現として適当(「地理」は平面的な印象)</p>	<p>「復旧・復興(の歩みと感謝)」と「震災後の防災の取り組み」は別の項目に分ける</p>	<p>「震災の教訓」の内容をより細分化し示す。個人・家族・組織・行政、あるいは自助・共助・公助の、全ての段階がきちんと機能すればこれほどの犠牲を生むことはなかった。私達一人一人の無自覚が招いた被害を直視し、「あなたも、いつでも被害者／加害者になりうる」事実を伝承する。</p>
<p>伝承の方法</p>	<p>"WHERE"と"HOW"が混じっている。「どこで」も入れる</p>	<p>「伝承の方法」に、中越のように地域住民が担い手となることを入れる</p>	<p>伝承の方法として、一番小さなコミュニティである「家族」も入れる</p>	
<p>震災伝承の体制</p>	<p>石巻市の計画なので、河南と桃生も対象として入れる。(体制の図、青丸部分)</p>	<p>【祈念公園連携プロジェクト】に大川小も含めて考える</p>	<p>「地域の連結」の説明図だけでなく、「門小・大川小の震災遺構」を核として世界へ情報発信するため、実現可能な「石巻市一東北一全国一世界へ」のつながりを説明する『概念図』を付け加える</p>	<p>体制について、空間的なものと人的なものをしっかり分けて考える</p>